先哲格言

修身要訓

中村正直 譯

日本教育會書籍館
一八函
二架
三〇號
七册

K110.1
106
3

K110.1
294

東京帝國大學圖書之印

先哲格言 脩身要訓 卷三

近江 中村鼎五 編

第一章

○己を盡す、之を忠と謂ふ 程子語

○臣君ふ事ふるに、忠と

以て也　論語

○君子其孝を行ふ小、必まづ忠を以てす　忠經

○君小事へて忠ならざれば、孝にあらぞ　禮記

○百行の善ありと雖、忠なければ皆ほろぶ　日新館童子訓

○萬善ありと雖、忠孝の道うすくば、君子とすべからぞ　初學訓

第二章

○人の爲小益あること

をせばして、我身よ利あることのみするい、小人の心なり。五常訓

○道近しと雖行らざれば至らず、事小なりと雖爲さざれば成らず。韓詩外傳

○君子いよく小物をつとむ、故ふ大患ふし。國語

○事の成るや、必之を敬をるふ所の事、其敗るゝや、必之を慢るよあり。荀子

○利を貴び義を輕んず

るい、小人の心なり　畜德錄

○人と約をふさゞ、必其信を守るべし　大和俗訓

第三章

○孝悌忠信い、身を立つる本ふり　省心雜言

○道を教るの師い、其恩尤重し、君父と同じく、貴ぶべし　初學訓

○善人を見て、之ふならひ、不善人を見て、之を改む、善と不善と、皆吾師ふ

○賢を見ては、齊しからんことを思ひ、不賢を見ては、内ふ自ら省る　論語

○聖人は心を以て、耳目を以て、心を導く　説苑

○一念惡を思ひ、一事惡を行へば、天道ふそむく　初學訓

第四章

○人とそしるは、道理よ

そむくのみならず、必身の禍とふる　初學訓

○分ふ過ぎて、福を求むれば、反て禍を招く　傳家寶

○禍を畏るれば、則福生じ、福を忽ふをれば、則禍至る　省心雜言

○勤むる人い必富む、慎む人い必禍ふし　大和俗訓

○前車の覆へるい、後車の戒なり　漢書

○一言の過も、莫大の禍

とふり、一事の失も、終身の憂となる、つゝしまざるべからず（大和俗訓）

第五章

○務めて怠らざれば、窮も追ふ及ばず、務を怠る時は、福も保つことを能はず（童子訓）

○少くして能勞ふ服すれば、老て必安逸なり（省心雜言）

○名を成さゝ、毎ゝ窮苦の日ふ多し、事を敗るゝ、

多く得意の時ふ因る 紳瑜

○事い勉強ふ由り、勉強して學問をれば、聞見博くして智益明ふり、勉強して道を行へば、德日ふ起りて、大ふ功あり 前漢書

○懈意一たび生ぞれば、便ふを自暴自棄なる 程子語

○精神一たび到れば、何事り成らざらん 朱子語

第六章

○親と愛をる者い、敢て

人を惡まず、親を敬する者い、敢て人を侮らず 孝經

○父母の愛する所い、之を愛し、父母の敬する所い、之を敬せよ 禮記

○長者教誡をること勿らば、首をたれて之をきくべし、妄ふ自ら議論すべからぞ 朱子童蒙須知

○煩を厭ふ者い、決して成ることなるの理ふし 呂氏童蒙訓

○君ふ事へて、身をかへりみず、私ふくして、誠をつとむべし 初學訓

○君父ふ事ふるに、誠ふけきび、忠孝ふたらず 大和俗訓

先哲格言 脩身要訓巻三 終

官許
東京中近堂

此實印ヲ捺シタルモノハ
本書ニ
直版ト証トスルモノナリ

明治十八年一月二十二日版權免許
同　年三月出版

定價金五錢

編者　滋賀縣士族　中村鼎五
滋賀縣大上郡彦根町六番地

出版人　東京府士族　中島精一
東京銀坐二丁目

發兌　中近堂
東京芝區三田國町三番地
大阪備後町四丁目　中近堂支店
名古屋東本重町一丁目　中近堂支店

賣捌
東京通三丁目　丸善商社
仝芝三島町　山中市兵衛
仝本町　金港堂
仝通二丁目　稲田佐兵衛
仝通二丁目　北畠茂兵衛
仝馬喰町　石川治兵衛

賣捌
東京横山町　出雲寺萬次郎
仝油町　水野慶次郎
大阪備後町　梅原龜七
仝南久宝寺町　前川善兵衛
西京河原町　大黒屋太郎右衛門
仝寺町　田中治兵衛

先哲格言

修身要訓

中村鼎五編

四

日本教育會書籍館
一八函
二架
三〇號
七冊

Z.57
378

K110.1
106
4